

表紙のユーモラスな「すごろく」をご覧いただきたい。これは『郡山発達史須語録』である。明治元(1868)年から大正14(1925)年にかけて、猪苗代湖からの疏水を農業のみならず、水力発電にも活用し、工業化を図ることで発展した郡山の様子が時系列に沿って32マスで再現されている。大きさは54×77cmと、なかなか迫力がある。

発行兼著作者は松山伝三郎(号は福堂)。安積郡多田野村出身の福島新聞記者。郡山史談会の幹事であり、『郡山耕地整理誌』、『安積開墾大観』、『開成山開拓五十年記念』といった郡山に関する著作もある。絵柄の片隅には「露子」という画家名が書かれているが、詳しくは不明である。また、枠外の部分には遊び方の説明がある。

右下にあるスタートの「ふりだし」には、「明治元年八月 兵火にかかり全町焦土となる(戸数710 人口2890)」と書かれてある。絵柄は、刀を振りかざし戦うハチマキ姿の武士二人。郡山にとって戊辰戦争は、7割もの家屋が焼失する大惨事であった。以降、時計回りで渦巻き状にマスがすすむにつれて、郡山が発展していく。

では、各マスを内容別に分け、数の多い方から見てみよう(カッコ内の数字はマスの番号を表す)。・神社仏閣関連が5マス(8,9,13,18,29)。9マス目には、如宝寺の鈴木信教和尚による孤児教育。・公的施設の開設が4マス(14,22,27,31)。14マス目では、明治19(1886)年の安積郡役所新築。・会社設立関係が4マス(11,24,25,28)。28マス目は、大正10(1921)年の郡山電気株式会社新築。それを山高帽の紳士が誇らしげに眺めている。・学校関係が3マス(4,7,26)。7マス目は、明治9(1876)年の金透校運動会。運動帽をかぶったランニング姿の児童が元気に校庭を走っている。ちょうど、同校出身の明治文化研究家、石井研堂が通学していた頃の様子である。・鉄道関連が3マス(15,19,21)。15マス目は、福島県下で初めて開通した郡山-東京間の鉄道。蒸気機関車を和服姿の子供たちが両手を上げて見送っている。以下、天皇巡幸(6,12)、町制市制実施(17,30)、水道布設(16,23)、公的制度関係(2,3)、開墾関係(5,10)が2マスずつ、劇場開設が1マス(20)となっている。

すごろくの中央にあるゴールの「上がり」では、大正14(1925)年当時の郡山の道路や鉄道が大きく描かれ「郡山土木監督所設置 郡山商工大学 郡山文化大学 毎月講座を開く 戸数約7700 人口約40030 予算52万円」と添書されている。スタートの「ふりだし」時と比べると、戸数は約11倍、人口は約14倍に増加している。郡山市はその後も発展を続け、平成9(1997)年には東北で初めての中核市となった。平成20(2008)年1月1日現在の戸数は12万9507戸、人口は33万9360人である。

日本の絵すごろくは、鎌倉時代、天台宗において、若い修行僧向けに仏の教えを遊びながら学ばせようと考案された「仏法双六」がその端緒である。一般化したのは江戸時代後期、版画が普及してからだ。明治以降は、教材として「教育すごろく」、商品や観光地をPRする「広告すごろく」、国家思想や政策流布を図る「宣伝すごろく」等、大いに用いられた。現代では、ボードゲームやテレビゲームに形を変えて親しまれている。余談になるが、今回紹介したすごろくは、『古書目録にみた「すごろく」』(かわじ・もとたか編著)によると、およそ5万円の価値がある逸品だという。

ご来館のうえ、ぜひご観賞していただきたい。

地域資料チーム：遠藤豊